

希望の党のオウンゴール？で284議席驚掴み

果たして自民党は「勝てば官軍」でいられるのか

政治ジャーナリスト 鈴木哲夫

「バラ付け」で冴えない顔

「全国を応援に回りましたが、自民党の風は全く感じなかった。野党が分裂して相対的に自民党が勝った。我々は謙虚にやつて行かなければ、今後大変なことになると思います」（自民党 山本一太元沖縄・北方担当相）

「全国で感じたのは、飽きですね。加計学園問題を含め、不信任感を持っている方が相当いるということです」（小泉進次郎自民党筆頭副幹事長）
284議席と圧勝した自民党だが、本当に勝ったのか。身内の自民党議員からは冒頭のような声が相次いだ。確かに、自民党の得票は2012年に政権奪取した時から大きく伸びていない。

投票率が低く、おまけに野党が分裂しているから勝利しているという構図は、山本氏が指摘するように厳然とある。

また、今回の総選挙の投票票直前にFNN（フジニュースネットワーク）

が実施した世論調査では、希望の党など野党の失速によって、自民党が圧勝の傾向を示したが、同時に、内閣支持率が42・5%だったのに対し、不支持が46・3%と、何と支持を上回ったのだ。

これには、自民党の選対幹部も、「普通はあり得ない。これだけ自民党が支持を集めていれば、内閣だつて支持されるはず。つまり、この数字が意味するところは、『自民党はOKだが、安倍首相はNO』ということだ。モリ（森友学園）カケ（加計学園）問題で安倍首相が失った信頼は取り戻せていないということだ」と慌てた。

安倍首相については、同じく投票直前の朝日新聞の調査でも、安倍首相続投を望まない人が51%と過半数を占めたのだ。まさに、冒頭の

小泉氏の指摘どおりだ。
当の安倍首相も、投票票日の当選者のバラ付けの時に笑顔を見せなかった。緩みと取られないように、表情を意識的に引き締めたのかもしれないが、「翌日の閣議の時も、周囲にも

謙虚にと繰り返していた」（首相側近）というから、勝利の裏側にある、決して漫然といはしてられない空気を察しているのかもしれない。

安倍首相に近い自民党ベテラン議員はこう話す。

「選挙が終わったからと言って、勝った勝ったと喜んでられない。本来なら、勝利すればそれは安倍首相の信任であり、来年の総裁選3選だつて担保されるはずだが、それはあくまでも安倍首相やその周辺の甘い見通しだろう。選挙の間も国民の不支持はマクマのように底辺で消えなかったことが証明された。今後国会で再びモリカケ問題が追及され対応を誤ると再燃する。支持率が低迷すれば、総裁選で、石破茂元地方創生相や野田聖子総務相などが名乗りを挙げて党内政局になることは充分あり得る」

また、今回の選挙結果を細かく見て行くと、確かに安倍政権にとつては安穩としてられない結果が見えて来るのだ。



「具体的には、例えば北海道、新潟、沖縄などがそう。これらのところでは小選挙区で自民党が多く負けているんです」と話すのは、自民党の選対幹部議員だ。

「まず北海道は、TPP以来今のEPAへと続く農業問題を相変わらず抱えています。また、北海道は地方経済も落ち込んだままで、アベノミクスの恩恵などない。次に新潟は原

選挙で圧勝を果たした自民党だが、安倍氏を始め幹部の表情はいつになく堅い（自民党）

発問題を抱えています。去年の参院選や今年の知事選とずっと反原発候補が勝利して来ているほど。そして沖縄は米軍基地問題を抱えています。こうして見ると、農業、地方経済、原発、基地や安全保障など、実はどれも安倍政権の重要課題ですが、こうした問題を抱えている地域では小選挙区で自民党候補が敗れています。しかも、北海道は立憲民主党と自民党の一騎打ちが多く、新潟は無所属候補を野党4党の枠組みで統一候補にして、沖縄も野党で候補を一本化するオール沖縄態勢で、いずれも一対一の構図になって、その結果自民党が負けている。この結果を甘く見てはいけない。今後、立憲民主党などを中心に野党が再々編まれ、次の選挙は、そうした一対一の戦いという選挙区が増えれば自民党は危ないということです」

確かに、北海道や新潟、沖縄などと同じような構図になっているその他の選挙区も、この幹部が示す危機感を証明するような結果になっている。

トータルで見れば、自民党と希望の党、あるいは立憲民主など一騎打ちになった小選挙区は36あったが、戦績は自民党が19勝、野党が17勝

と何と互角だったのだ。

それに比べて、自民党と希望の党、立憲民主党と三つ巴になった選挙区は17あり、こちらの戦績は自民党が13勝で野党が僅かに3勝。ただ、もし野党が一本化していれば、半数以上は逆転しているという結果だった。

今夏の総選挙、「謙虚にならなければ大変なことになる」（山本氏）という自戒が自民党には必要だろう。

国政における小池劇場の失敗

一方、敵失状態を作ってしまった分裂野党。その混乱の主役が、希望の党という新党を急遽立ち上げ、代表に就いた小池百合子東京都知事と、これに合流して反安倍政権の「塊」を作ろうとした民進党の前原誠司代表。

また、合流を巡って、小池氏が公認候補などを選別し、これに反発したりベラル系枝野幸男氏が立憲民主党を旗揚げ。野党の分裂選挙となつてしまった。

総ては、小池氏の言動が原因だった。民進党との総選挙直前合流について「（丸ごと受け入れる気は）さらさらない」「排除する」と言い放ち、



小池氏の腹心・若狭氏さえも落選（希望の党）

小池氏の側近達は次のように小池氏の発言の裏側について話した。

「高揚感から勢い余って出た発言。本当に総理の道が見えて来たから」

「数少ない意見番の細川護熙元首相から『できる限り幅広く結集しなければならぬのに、あの言い方はなんだ』と叱られたという話もある。その後、小池氏が前言を翻し柔軟な発言に変わったのは、やはり思わず言ってしまった、つまりリベラル派を切るための確信犯ではなかったことの証明」

ただ、希望の敗因は小池氏の傲慢な印象の発言だけではないだろう。

特に小池氏の東京ではこんな部分も重なったのではないか。

「東京で希望へと移り公認された旧民進党の中堅らは、選挙の看板欲しさが透けて見えた。3区の松原仁氏、8区の木内孝胤氏、15区の柿沢未途氏、21区の長島昭久氏ら。結局小選挙区で当選したのは長島氏だけ。政策は議論したわけではなく厚みに欠けていた。小池さんの失言にそれらも重なった。東京の無党派層というのは、逆風になった時もまた一気に吹くというのが特徴で、それが起きてしまった」（落選した希望公

認前職）

それにしても、希望の党のガバナンスは酷かった。組織の体をなしていなかった。総選挙の公示日である10月10日の前日の9日には、こんなこともあった。

「全員ちゃんと立候補できるかどうか分からない。今確認作業で大変」そんな信じられない言葉を漏らしたのは、希望の党の事務方を背負って動いていた旧民進党の幹部職員だった。

「とにかく急」しらの新人が多いが、届け出る時の書類の書き方も、分からないという新人候補が多い。そうした手続きを支援するのは、希望側には組織がないから民進党の都道府県連が行なった。中には『書くのは県連職員じゃないの?』と白紙の書類をどーんと持ってきたり、戸籍謄本を取り忘れていたり、女性候補が両親同伴で県連に相談に来たり。供託金は法務局に納めるが、公示前日か祝日だったので納めていない候補がいそぐだとか、とにかく大騒動だった」

誰が公認候補を選び、誰が新人に選挙のイロを教え、誰が会計責任者なのか、政策責任者なのか。しかも、投票票日の当日に小池氏は都知事の

公務でフランスのパリにいた。

中継で、日本のテレビに出演し、「非常に厳しい有権者の判断が下った。完敗だった。（安倍政権への）批判の受け皿というより、批判の対象になつてしまった。『排除』という2文字が独り歩きしてしまい、責任を感じている。不快な思いをさせてしまったことが厳しい結果につながった」などと語りはしたが、希望の党の代表でありながら、開票日に日本にいないなど有権者に対して失礼。おまけに不在の間の代表代行を小池氏の一存で決めるなど、この党がガバナンスから何から何まで総てメチャクチャだという証明でもあった。

帰国後、両院議員懇談会が開かれ、そこでは小池氏の代表留任と国会議員からの共同代表選出などが決まったが、今後の希望の党の政党としての体裁はまだ見えない。「当面は政治的な求心力の低下は免れない。知事職の方でさえ、都庁内や都議会でもカリスマ性が弱まる」（都庁幹部）という声も出始めている。

「男を上げた」枝野氏の思惑

政策面でも、希望の党は内部で詰めなければならない部分は多い。細

動で失速した。知事選、都議選と見事な小池劇場を見せた小池氏が、今回はなぜあんな言動をとったのだろうか。

公認を巡っては政策協定なる者にサインさせたが、有権者には強圧的な「踏み絵」に映った。もっとも最初は、小池劇場も順調だった。

安倍首相の解散会見の9月25日をわざわざ狙って小池氏が新党結成を公言し、民進党の前原代表が解散当日に希望の党との合流で民進党内をまとめた直後には、自民党の世論調査でも何と希望は150議席をも獲る勢いを見せた。

ところが、前述のように相次ぐ言動で失速した。

知事選、都議選と見事な小池劇場を見せた小池氏が、今回はなぜあんな言動をとったのだろうか。



大躍進を果たし枝野氏の次の一手は（立憲民主党）

野豪志氏や長島氏などは保守色が強く、後から合流した玉木雄一郎氏らリベラル派もいる。小池氏自身は「安倍政権を倒す」と言いつつも、一方で「安倍政権とは」是々非々とも述べている。「是々非々」とは、野党が使う言葉ではない。ある時は政権を批判しても、違う場面では政権に寄り寄るといふことだ。是々非々政党は、有権者の目には曖昧に映る。希望の立ち位置の確立など課題は多い。

これに対して、躍進したのは公認を

外され決起した枝野氏率いる立憲民主党。支持したのは、小池発言と希望の姿に幻滅した無党派層だけでなく、これ等待っていた層もある。安保関連法案が可決された2015年夏、国会周辺では市民グループが反対の声を上げた。小さな子供を連れた母親や学生や有識者など大勢が、あれ以降、彼らが安倍政権に抱いて来た不満はずっと残っていた。

これまでの場合、例えば、ある法案に市民が反対の声を上げても、国会で可決された途端急に熱が冷めていたが、彼らは違った。立憲民主党が登場し、彼らは全国で立憲の候補者の応援など組織的に動き、勝利に貢献した。

そして、この立憲民主党を中心に、前述したような、政権と一対一の構図を作るための野党再々編が進みそうなのだ。

「希望と決別した枝野代表の立憲民主党と、今回民進党を離れ無所属で出馬し当選した岡田克也氏ら、それに希望に行つたが戻りたいという人、民進党参議院議員などが再結集もちろん、希望に残る人や参議院から希望に行く人も何人かいるでしょうが、保守色の強い細野氏らが希望

へと出て行つて、今度はより政策理念的にもコアになる政党になるはず。いずれはそこに社民党も合流し、共産党とも選挙協力するなど野党再々編の流れになるでしょう」（立憲民主党議員）

ただ、枝野氏は選挙期間中に、全国を遊説して回った際に、リベラル支持の有権者が多いことに感激し「ただの数合わせでなく、再々編は理念や政策をしっかりと擦り合わせてやうて行く」と話しており、再々編は時間をかけて進んで行くと考えている。

憲法改正は？ 国会運営は？

この他、今回の総選挙の争点の一つにもなった憲法改正は今後どんな道筋を辿るのか。

一般的に言われる改憲勢力は、改憲論議に前向きな自民党、公明党、希望の党、維新の会で、今回の選挙の結果、すでにこれらの党で発議に必要な衆議院の3分の2を占めた。

しかし、一気に発議となるのかは難しい。「ブレイキは実は公明党」と話すのは自民党幹部の1人だ。

「公明党は今回の総選挙で議席を減らした。安倍首相に対して、この時期に解散したことを不満に思っている。

連立を組んでいるとは言え、今後、さまざまな場面でより公明党らしさを主張するだろう。憲法改正もその1つ。9条については山口那津男代表を始め、支援団体の創価学会も改正は慎重姿勢。もし、衆議院で公明党が非協力的でも、自民党に希望と維新を合わせれば3分の2を超えるが、参議院も同じく発議には3分の2が必要で、ここは公明党の協力是不可欠。安倍政権は公明党に相当気を遣うことになるかもしれない」（同幹部）

この他、国会運営では、自民党はまず野党第一党を相手に話を始めなければならないが、これから第一党は、対立軸のはきりした立憲民主党になつてしまった。

「小池さんの希望の党が第一党なら話もしやすかったが、立憲はまず反対という明確な姿勢から入ってくる。しかも、国対委員長は戦間モードの辻元清美氏を決めて来た。国会対策も厄介だ。そこを強引に進めれば、またまた世論の反発もついて来てしまうから上手にやらなきゃだめだ」（自民党国対幹部）

前代未聞の混乱の総選挙のツケは、まだまだ国会で尾を引く。